

ANNUAL REPORTS OF STUDIES

Vol. XXXXXIII I 2002

ネとナの音調の計量的比較

—落語資料から—

服 部 匡

ネとナの音調の計量的比較

—落語資料から—

服部匡

0 目的と範囲、資料

本研究は、やや古い時期の東京語¹⁾で演じられた落語における終助詞ネとナの音調を出現環境により分けて比較し、その音調上の特性を明らかにしようとするものである。

筆者は服部(1999)で、従来あまり注目されていなかった「上昇しないネ」(前拍に対して上昇せずにつき、その拍中でも上昇しないもの)の存在を指摘すると共に、ネとナの音調特性の比較を行う必要性を指摘した(また、落語資料でのネとナの主な音調について服部(2001, 2002)で示すと共に、現代の共通語での「上昇しないネ」の実例を服部(2002)であげた)。ここでは、計量的観点からネとナの音調の比較を試みる。

本研究で用いる資料は、五代目古今亭志ん生(1890-1973)の演じた落語の録音のうち、比較的録音状態の良いCDの得えられた35話約14時間分である。文脈参照の便宜のため、その録音に対応した書き起こし(かなり正確であるがCDに収録されている内容と若干の出入り・相違がある)が『五代目古今亭志ん生全集』(弘文出版)に収録されているものを選んだ。用例の一覧は何らかの形で別に公表することとし、ここでの挙例は最小限にとどめる²⁾。

落語は自然発話ではないが、CD、DVDで大量に、かつ容易に利用できる発話資料としての価値は大きいと思われる。

本研究で取り上げる終助詞は、ネおよびナ(ネー、ナーのように延びるものも含む)である。今回は、いわゆる平叙文の主文述語(～ダロウは除く)に直

接（他の終助詞の後にでなく）つく場合を問題にする³⁾。ネのついた要素の判定について。「(～て) いる、(～て) くる」等の補助用言は、特に明確に独立した音調を取っているように聞こえない限りは前の動詞と一体化したものと見た。形式名詞類も同様に扱う。

田舎者、上方者等、東京語を反映しないと思われる登場人物の台詞は計数から除外した。また、発音不明瞭あるいは客の笑い声が重なる等の理由により聞き取りが困難な部分を除外している。

1 音調の種類

終助詞の音調的特性としては前要素に対する付き方、終助詞それ自体の音調、などが重要である。本稿では、一次的には、ナやネが前拍に対して上昇して（相対的に高く）付いているか、前要素に対し上昇せずについているかという点を問題にする。また二次的に、ネ・ナそのものの音調（ピッチ変動）を問題にする。ネ・ナの長さは問題にしない（現実的に、聴覚上長さの判別の難しい例が少なくないという理由による）。

次節以降に示すようなタイプにより主要な音調を表す。音調の機能的側面には立ち入らず、音声的実質のみを問題にする。また、音調のタイプ分けは聴覚的に可能な範囲で行うものであり、本格的な分析に基づくものではない。

「は次の拍が高く始まることを、」は次の拍が低く始まることを表わす。

1. 1 前要素が下がり目を持つ場合

ネ・ナの前の要素が下がり目を持つ場合である。「無い」につく場合を例として示す。

’ H

高く付く。それ自体の音調は、水平に維持されるものから自然下降に従うものまでの巾を持つ(ネーと延びるものも含む—この点は以下同じ—)。

例：ナ↑イ「ネ

’ H’

高く付くき、それ自体（拍中で、または2拍以上に延びてネ↑ー、ネー↑
ーのように一この点は以下下降に関して同じ一）、下降する。

例：ナ↑イ「ネ

’ N

上昇せずに付く。それ自体も、上昇はしない。それ自体下降するものも含
む。

例：ナ↑イネ ～ ナ↑イネ

1. 2 前要素が下がり目を持たない場合

「居る」につく場合を例として示す。

H 高く付く。それ自体の音調は、水平に維持されるものから自然下降に
従うものまでの巾を持つ。

例：イ「ル「ネ

H’ 高く付く。それ自体、下降する。

例：イ「ル「ネ

N 上昇せずに付く。それ自体の音調は、水平に維持されるものから自然
下降に従うものまでの巾を持つ。

例：イ「ルネ

N’ 上昇せずに付き、それ自体下降する。

例：イ「ルネ

1. 3 補足

音調の種類について三点を補足する。

1. 1-2 で述べた主な音調の他に、やや稀な音調として次のものがある。
これらは以下の数に含めていない。

ア ネ・ナの音調が上向きのもの 3例

(1) え？計略にかけやがったなあ

カ「ケ」ヤガッタナ／ (穴泥 12:12)

(2) [略]みんな車屋にやんなあ。

ク「ルマヤニヤンナ／ (替わり目 5:15)

イ 高く付き、下降した後上昇するもの⁴⁾ 1例

(3) よくお前さんなんだねえ、家をあけないで帰って来たねえ

カ「エ」ッテキタ「ネ」／ (お直し 26:05)

ウ 文全体として特殊な音調を取っているもの⁵⁾ 7例

(4) 凄いですなあ

スゴイデスナー

1 / 4 55

(5) うーん、良かったなあ

ヨカッタナー (千両みかん 20:21)

1 / 5 2

音調のタイプの判定について。ネ・ナが前拍に対して上昇してついているかどうかの判定の難しい例は、上昇してついていると見た⁶⁾。また、ネやナ自体が下降しているかどうか判定し難い例は、下降していないと見た。他の基準の取り方もありうるし、個人的な聞き取りの偏りがあるかもしれないが、ネとナの音調を同一の基準によって比較するのは無意味でないと思われる。

以上によってもなおタイプを判別し難い例が1例ありこれは以下の数に含めていない。

2 調査結果

出現した終助詞の全数を示すと表1のとおりである。なお、ナ・ネのついた要素は下がり目を有しないものより有するものの方が遥かに多いが、これはネ・ナの有無に関わらない述語の一般的傾向と思われる。

表 1

ナ	ネ
578	385

2. 1 音調別の出現度数

最初に、ネとナについて、1で区別したそれぞれの音調の出現度数を示すと、表2のようになる。ネでもナでも、高くつくことの方が上昇せずにつくことより多い。しかし、ナ・ネ共に、上昇せずにつくものも、例外とは言い切れない量の使用例があることがわかる。

表 2

ナ						
'h	'h'	'n	h	h'	n	n'
377	143	32	9	9	7	1
ネ						
'h	'h'	'n	h	h'	n	n'
180	125	30	22	7	9	12

2. 2 人物による相違

音声としての落語は、「地」の部分（演者自身の言葉で客に語りかける部分）と、登場人物の台詞の部分からなる。この両者では、当然文体的特徴の相違がありそれが終助詞の用いられ方に反映する可能性がある。

そこで、地の部分とそれ以外の部分、後者については男と女の台詞にわけた数を表3に示す。

表 3

地・ナ	地・ネ	女・ナ	女・ネ	男・ナ	男・ネ
253	51	6	99	319	235

まず地の部分について述べる。ナの使用が多い。ナもネも多くの場合は(6)のように述語が敬体であるが、時に(7)(8)のように常体のこともある。

(6) 明治の頃はってえと、まず大正へかかるまで物が安ごんしたな(’H)。

え、ただいまの高いなんてな、ないですね(’H)。(鮑のし 3:39)

(7) 「今度の師匠は女かい？」

「男」

「じゃあ行かねえ」

なにしに行くんだか分からないね(’H)。(稽古屋 4:28)

(8) あの鬼殺しなんてのを穿いて。色っぽくないね(’H)、あれあ、ねえ。(五人廻し 7:38)

地の部分におけるネ・ナの数音調のタイプ別に示すと表4のようになる。’hの型のナが顕著に多いことが分かる。例(6)の前半のような言い方が落語の地の部分での語りの典型的なスタイルである。

表4

ナ						
’h	’h’	’n	h’	n		
236	13	3	0	1		
ネ						
’h	’h’	’n	h	h’	n	n’
32	6	8	1	1	2	1

次に登場人物の台詞について述べる。ネ・ナの音調別出現数は表5の通りである。

音調を比較する以前に明らかな事実は、女性はナの使用例が少ないことである(他に計数外の例で、女性の心内語(〜と思った)を引用する部分での使用がある)。これは、ネとナの相違についてよく指摘されるどころと一致している。

なお、女性のナの使用例6例のうち4例の発話人物は「鳶頭の姐さん」（三軒長屋）であり他の面でも男性的な言語特徴を示している。残りは母が子に向けての発話（子別れ）と、女性が男性の発話を引用する部分（注3の4の但し書きに該当）である。

表5

女

ナ

'h	'h'
2	4

ネ

'h	'h'	'n	h	h'	n'
45	44	1	7	1	1

男

ナ

'h	'h'	'n	h	h'	n	n'
139	126	29	9	9	6	1

ネ

'h	'h'	'n	h	h'	n	n'
103	75	21	14	5	7	10

男性の台詞のうち（述語に下がり目のある場合）「高く付くもの」（'h と'h'の和）に対する「上昇せずにつくもの」（'n）の比を取ると、ナでは265:29（≒9:1）ネでは178:21（≒8.5:1）である。つまり、その比には大差がないことが分かる。女性のネではその比が89:1と大きく偏っているが、ナの使用例が殆どないため両終助詞の比較はできない（上昇せずにつくタイプがどちらかといえば女性的でないものである可能性は一応考えられる。現在の共通語でのネについ

て、橋本（2000）が同様のことを指摘している）。

次節以降では、地の部分は問題にせず、台詞の部分の数のみをあげる。

2. 3 後続要素の有無

終助詞の後に後続要素があるかどうかによって、終助詞の音調の出現傾向が異なる可能性がある（このことは橋本（2000）が指摘している）。

「終助詞の後に、明確なポーズなしに次の要素が続いているもの」とそうでないものの数を示すと次の通りである。次の要素というのは、文法的観点から前の文の一部（後置要素）と考えられるものと、そう言えるか疑わしいもの（例えば「おい」）の両方を含む。ただし、明らかに次の文の一部とみなすべきものは含まない。

後続要素のある例とは例えば次のようなものである。

(9) しょうがねえな('N)=どうも。(雪とん 19:26)

(10) 理屈は言えませんな('H)=命の親なんだから。(火焰太鼓 2:52)

(11) 汚ねえ太鼓だな(H)=こりゃな。(火焰太鼓 12:13)

結果は表6の通りであり、他のタイプに比べ上昇せずにつくタイプで後続要素のある率が顕著に高いということはないようである。

ナ

	'h	'h'	'n	h	h'	n	n'
非後続	108	117	19	8	9	6	1
後続	33	13	10	1	0	0	0

ネ

	'h	'h'	'n	h	h'	n	n'
非後続	104	110	16	8	6	4	11
後続	44	9	6	13	0	3	0

2. 4 文体

述語が敬体のものと常体のものに分けて示すと、次の通りである。

敬体の用例数が少ないため明確なことは言えないが、(ネでもナでも) 上昇せずにつくタイプが敬体で用いられないわけではないことが分かる。

ナの場合

常体

'h	'h'	'n	h	h'	n	n'
121	118	28	9	9	6	1

敬体

'h	'h'	'n
19	12	1

ネの場合

常体

'h	'h'	'n	h	h'	n	n'
127	94	20	20	6	7	11

敬体

'h	'h'	'n	n
21	23	2	1

3 結論

やや古い時期の東京語を反映した志ん生の落語においては、ネでもナでも、前拍に対して高く（上昇して）つくものの他に、上昇せずにつくものも用いられていた。上昇してつくタイプの方が数は多いが、上昇せずにつく（ネ自体も

上昇しない)ものが例外的であるとまでは言えず、このことに関してネとナでの傾向の相違は明らかでない。「地」の部分と女性の台詞では、上昇してつくものの率が特に高い。

他に後続要素の有無、文体の観点からの比較を行った。

なお、平叙文以外(～してくださいな、ごらんな、どこですな、等)の例については別の機会に問題としたい。

上昇しないネを全く用いない方言(あるいは話者)の存在を否定するものではない。しかし、ある終助詞の本質を明らかにしようとする場合、その終助詞の示す特徴のうち話者や方言等に依存した(いわば偶然的な側面を持つ)特徴と、それらを問わずに認められる特徴とを区別する必要があるように思われる(これは音調的性質に限ったことではないが)。

方言によって、ある終助詞(のある音調)が、一種の特殊な位相的・文体的制限を持つことがある。例えば、共通語(東京語)での上昇的なワは使用が女性に限られる。こうした制限は、その終助詞(と音調)の性質から必然的に導かれるものではない。現にそうした制限を持たない方言もある⁷⁾。

ネが上昇してつくことに対する制約を有する方言/話者においても⁸⁾、その制約は、ネに固有の特質から導かれるものかどうかを疑ってみる必要があると思われる。

資料について

使用したCDと演目は次の通りである。

1) 古今亭志ん生名演集(ポニーキャニオン)より

五人廻し 三枚起請 怪談阿三の森(上・下) 猫の恩返し 佃祭 子別れ 大山詣り 三年目 安兵衛狐 首ったけ 穴泥 駒長 たがや 天狗裁き 小間物屋政談 三軒長(上・下) 素人相撲 吉原綺談(上・中・下) 心中時雨傘(上・下) 千両みかん

2) ザ・ベリー・ベスト・オブ・志ん生(日本音楽教育センター)より

火焰太鼓 強情灸 黄金餅 稽古屋 替わり目 文違い 淀五郎 お直し 鮑のし

3) 花形落語特撰(テイチク)より

雪とん

注

本研究は科学研究費補助金による研究成果の一部である。

- 1) 「するです」、「したです」のように終止連体形に「です」が直続することがある（中村（1948）参照）などの古い特徴を残している。
- 2) 本稿でもそれぞれの例についてCDでの時間的位置を示す。ただし今回は、当該箇所を含む一まとまりの発話の先頭部分の時間で示す。
- 3) 次のようなものは数に含まない。
 - 1 文中の句につくもの：それがね、等
 - 2 1に準じた働きをする敬体のもの：それがですね、それがでございますね、等
 - 3 文中で間投的に用いられる「なんだ（です）な（ね）」、「そうだ（です）な（ね）」、「あれだ（です）な（ね）」等 例：「まあなんだね、みかんを囲ってありますがね（略）」
 - 4 引用部分に現れるもの：「～」と（って）--、「～」なんて--、「～」じゃないよ、その他。ただし、『～。～』と言った」のように引用部分が二文以上に解しうるものの最終文以外は数に含む。また文として独立しているものは数に含む。
 - 5 体言（に相当する要素）に直続しているもの。
なお、服部（1999）で指摘した「ダーナ（ダーネ）」の短縮と見られる「ダナ（ダネ）」は、本来ダワナのように終助詞連続を含むものと見て、考慮外にしている。
- 4) このタイプは、本稿で扱わない、文中の句につくネにむしろ多く見られる。一例あげておく。
いいえだれも嫌じゃないんですけどねえ、ご隠居さんがあんまりやさしいんであ
たし嫌なの（駒長 3:01）
ナ1インデスケレド「ネ1」
- 5) 川上（1977:166）に指摘されている「特別強い感動によって単語のアクセントが無視される場合」にあたる。
- 6) 服部（2001）の（1）の例は（ここでいう'nの例としてあげたものであるが）、'hとすべきであった。
ここで'nとしたもののうち、下がり目での下降が通常より小さく、ネの終わりまで高さが維持されるものが一例ある。これは上昇調の変種とみなすべきかもしれない。
- 7) 音調の異なる方言であり単純に比較できないが、高接するワが男女を問わず用いら

れる方言については服部（1992）の注4で指摘した（京都市方言に関する文献は、中井幸比古氏よりご教示頂いたものである）。最近出た中井（2001）の会話資料（京都）にも、男女共の発話例が見られる。

- 8) 共通語（東京語）でもこうした点に関して年代差がある可能性はあるが、共通語を話す若年層で「上昇しないネ」が使用されていないわけではない。事例をあげておく。服部（2002）も参照されたい。

終ニ：すごいね。あんたたち、しゃべり。全然入ってけなかつたもん。

（ビューティフルライフ 第3話 DVD 29:00 発話者：木村拓哉）

終ニ：容赦ないっすね（え）、全然。

（同 第6話 14:20 発話者：木村拓哉）

引用文献

- 川上泰（1977）『日本語音声概説』 桜楓社
- 中井幸比古（2001）『方言会話資料 京都』 科研報告書 （『京阪系アクセント辞典』 勉誠出版 2002 所収）
- 中村通夫（1947）『東京語の性格』 川田書房
- 橋本修（2000）「終助詞「ね」の、自然下降型イントネーション」 筑波大学『東西 言語 文化の類型論』 特別プロジェクト研究報告 117-127
- 服部匡（1992）「汎性語の終助詞ワについて」『同志社女子大学学術研究年報』 43-IV 1-15
- 服部匡（1999）「終助詞ネの音調に関する森山説への疑問」『国語学』 199 90-92
- 服部匡（2001）「終助詞ネに関する二三の考察－落語を音声資料として」『同志社女子大学日本語日本文学』 15 1-10
- 服部匡（2002）「終助詞の音調について－落語資料を中心に」『同志社女子大学日本語日本文学』 16 1-17

服部（2001）の正誤表

箇所	誤	正
p11 16	小学館	日本音楽教育センター
p3	(1)の例	削除[本稿の注6を参照]
p3 115	な、なんだい	な、なんだな
p4 14	5-0:38	5-4:37
p4 123	7-1:21	4-3:00

p6	(18)の例に追加	(圓生 品川心中 SRCL3485 7-2:57)
p7	=(1)の例	削除[本稿の注 6 を参照]
p7 114	7-	6-

2 ページおよび文献表で川上夔先生のお名前が誤っていました。お詫び申し上げます。

ウェブ公開に当たって下記を訂正済み

7頁 下から8行目 $n! \rightarrow n'$

9頁 7行目 $n! \rightarrow n'$

12頁 6行目 服部(2001)→服部(2002)

N' H'などとn' h'などは同じ意味です。記号の大文字小文字の区別はありません。